

**第495回 1月25日開催
出席委員（50音順・敬称略）**

荒巻 裕 伊藤 芳明
大村 英昭 木下 明美
櫻井 美幸 森 輝彦
倉光 弘己(書面参加)
黒田 勇(書面参加)

◆ テレビ番組

「阪神淡路大震災10年特別企画 悲しみを勇気にかえて」

1月14日（金）午後6時55分～8時54分放送

毎日放送の第495回番組審議会は1月25日大阪市北区の本社で開かれ、1月14日に放送したテレビ番組「阪神淡路大震災10年特別企画 悲しみを勇気にかえて」を審議した。この番組は、地震発生直後からの膨大な映像と実話を元にした4話のオムニバス・ドラマと、ナビゲーターのストーリー紹介で構成。被災地の人たちが苦境を乗り越え生きてきたこの10年の姿を描く。

委員の主な意見

- * 溢れかえるほどたくさんの震災番組があった中で、感銘深い作品が生まれた。震災10年という節目は、私たちが何を学び、これからに生かしていくかが一番大きな課題。ヒューマンドキュメンタリーという作り方で、いのちの尊さ、大切さがよく出ていた。
- * 生き抜くことの尊さ、家族とは親子とは何かという番組の見所や内容は伝わり、十分表現されていたが、震災の印象がまだ生々しいだけに、ドラマにすると美しい過ぎてちょっとうすく感じてしまう。
- * これが創作されたドラマなら、できが良いとはいえない。親を失った子どもが祖父母にわがままを言うシーンなど、思い出に基づくから、単調になっている。だが事実なのだ。創られた話なら作為的に見えるだろうが、すべて事実なのだ。最後に本人たちが顔を出している。年のせいでゆるくなった涙腺は、どうにも締めようがなかった。

- * 番組を見てずいぶん泣いた。テレビの手法として、実写とフィクションの部分をまぜていて、それがあつ種の緊張感を与えている。ただ4話ではなく、本数を減らしてでも途中の確執などを描いたほうが説得力をもつた。短い時間で人間賛歌に無理に持つていった感じがする。
- * ナビゲーターが必要だったのか。ドラマ仕立てのドキュメンタリーでいわば枠が二重にある上に、ナビゲーターを入れたので、もう一つ額縁が外にできていて、リアリティが浮いてくる。
- * 実話とドラマ部分がうまくすり合わされている。描かれている家族が悲しみを乗り越えた上での番組への協力、今までのMBSの震災報道の取り組み、報道局と制作局とのパートナーシップがなければ番組はできていない。
- * 今年終戦60年、私はまだまだ遠景であの戦争を見ることができない。震災からまだ、たった10年。非常に苦しみ、悩みをかかえて生きている方が多い。そういう中で優れた番組が作られたのは意義深い。
- * 何よりも評価したいのは、10周年記念に声高に防災を叫ぶのではなく、震災とかかわつた人々のドラマを作つたこと。驚きと恐怖と、悲しみと勇気と希望とが交錯した数ヶ月を10年後にドラマという形式で整理しようとした試み。実際の被災者の経験を短いドラマにしてつむいでいく。私はこれを「当事者ドラマ」と呼んでみたい。当事者として、われわれの経験の記憶がそれを補い、自らの人生と照らし合わせることができるドラマだ。すべてのエピソードが涙なくしてみることもできないものだった。

◆ ラジオ・冬季聴取率調査について

12月に行われたラジオの冬季聴取率調査の結果について、ラジオ局長が報告した。

◆ 「JNN系列放送番組審議会・近畿中四国地区協議会」について

11月18日に松山市で開かれた「第12回JNN系列放送番組審議会・近畿中四国地区協議会」について委員長が報告した。